

紀 要

第10号

— 目 次 —

序	
縄文時代石器研究の方法論序説	(鈴木 康 二)
弥生社会からみた独鈷石	(田井中 洋介)
犬上川左岸扇状地における考古学的研究	(近江歴史クラブ)
犬上川左岸扇状地における須恵器編年試案	(畑 中 英 二)
犬上川左岸扇状地の古墳群について	(北 原 治)
近江における階段式石室の検討	(堀 真 人)
犬上川左岸扇状地における無袖式横穴式石室	(辻 川 哲 朗)
古墳時代後期から終末期にかけての土壙墓の問題点	(畑 中 英 二)
犬上川左岸扇状地の古墳にみられる習俗の研究	(畑 中 英 二)
犬上川左岸扇状地における馬具副葬土壙墓について	(山中 由 紀 子)
犬上川左岸扇状地における古墳出土の土器様相について	(中 村 智 孝)
犬上川左岸扇状地周辺の生産と流通の概観	(畑 中 英 二)
東大寺水沼荘の開発	(神 保 忠 宏・畑 中 英 二)
「湖東系軒丸瓦」に関する基礎的考察	(重 岡 卓)
古代王権論にむけて	(細 川 修 平)
日野町出土の瓦器碗をめぐって	(土 垣 幸 徳)
滋賀県伊香郡高月町井口集落周辺の水利と環境	
井口城とその立地	(神 保 忠 宏)
水と環境教育	(佐 野 静 代)

1997. 3

(財)滋賀県文化財保護協会

日野町出土の瓦器椀をめぐって

—日野町五斗井遺跡出土品を中心に—

上 垣 幸 徳

はじめに

中世の土器を語るときに供善形態の「土器椀」を避けて通ることはできない。長年の中世土器の研究によって地域によって器種の違いはあるが、日本全国のあちこちで椀型の形態を持つ土器が生産され、流通していることが明らかになっている。中でも、畿内(1)を中心に広がる瓦器椀は中世土器研究の発端となったことも含めて中世の土器椀の中で重要な位置を占めているといえる。

畿内の周辺地に当たる近江においては中世の大半で土器椀の主流を成すのは近江型黒色土器である。しかしながら、普遍的に見られるとは言い難いものの瓦器についてもその出土が知られている。特に、蒲生郡内で出土する瓦器椀については、その特徴により「近江型瓦器椀」(2)として分類されている。

以前筆者が日野町内で発掘調査を行った際にも、瓦器椀がいくつか出土した。中でも、五斗井遺跡で出土した瓦器については整理中に気に止まるものがあった。ここではその出土品を中心に、日野町で出土する瓦器椀をめぐりいくつかの事象について見てみたいと思う。

五斗井遺跡出土の瓦器

平成3年度の調査では、設定した調査区のいくつかで瓦器椀が出土した。五斗井遺跡における中世の土器椀については、平成3年度以前の調査で、近江型黒色土器椀の出土が知られているが、瓦器椀についてはこれが初めての出土である。特に集中した地点はF地区のSD-05であった。報告書でも述べたとおり、この遺構は浅い落ち込み状になった溝である。瓦器はこの溝の底に張り付いた状態で出土した。出土した瓦器は碎片が多く、実測するに耐えうるものが少なかった。個々の遺物の詳細については報告書(3)に当たられたい。出土時の状況からは、一括廃棄したのではないかと考えられ、山川均氏が指摘した「一味神水」(4)のような儀式に伴うものである可能性もある。また、この遺構からは黒色土器は見られず、瓦器と土師皿によって供善形態の土器

が構成されていたように見える。通常、黒色土器に混じって瓦器が出土することが多い滋賀県では希な出土状況といえる。

日野町内での瓦器椀の動向

日野町内では五斗井遺跡以外にも瓦器椀の存在が確認されている。詳しい内容は別表および各報告書に譲るとして、ここでは瓦器椀の形態について見てみたい。

瓦器椀の形態を詳しく見ると、おおよそ、次の3つの形があることに気が付く。

タイプ1. 体部が内湾するもの。

タイプ2. 体部が直線的に立ち上がるもの。

タイプ3. 体部が屈曲しながら立ち上がるもの。

これらの形態間の関係であるが、遺跡での出土状況から推測してみたい。五斗井遺跡では前述のとおりSD-05から一括して瓦器椀が出土している。そこには少なくともタイプ2と3が含まれていることが確認できる。中甲津遺跡(5)では厳密に言えば同一遺構ではないのだが、掘立柱建物SB-08を構成している柱穴からタイプ2と3がそれぞれ出土している。このような状況から考えると、それぞれの形態の出現時期は別にして、タイプ2と3は平行する時期が存在するといえる。

蒲生郡内での状況

前述したとおり、近江型瓦器椀の分布範囲は蒲生郡内に限られている。当然日野町も蒲生郡内にあるから近江型瓦器椀が出土しても当然のことである。ここでは、蒲生郡内での五斗井遺跡出土品を取り巻く状況を見てみたい。

蒲生郡内における最初の瓦器の出土例は蒲生町蒲生堂廃寺での調査の際である。北川浩氏(6)によって「近江型瓦器椀」が設定されたわけである。しかしながら、後に森隆氏が指摘した(7)ように蒲生堂廃寺出土の瓦器椀はいわゆる「大和型瓦器椀」(8)にかなり近いと思われるものである。このように本来は近江型瓦器椀も大和型瓦器椀と密接な関係を持っていたものと考えられる。

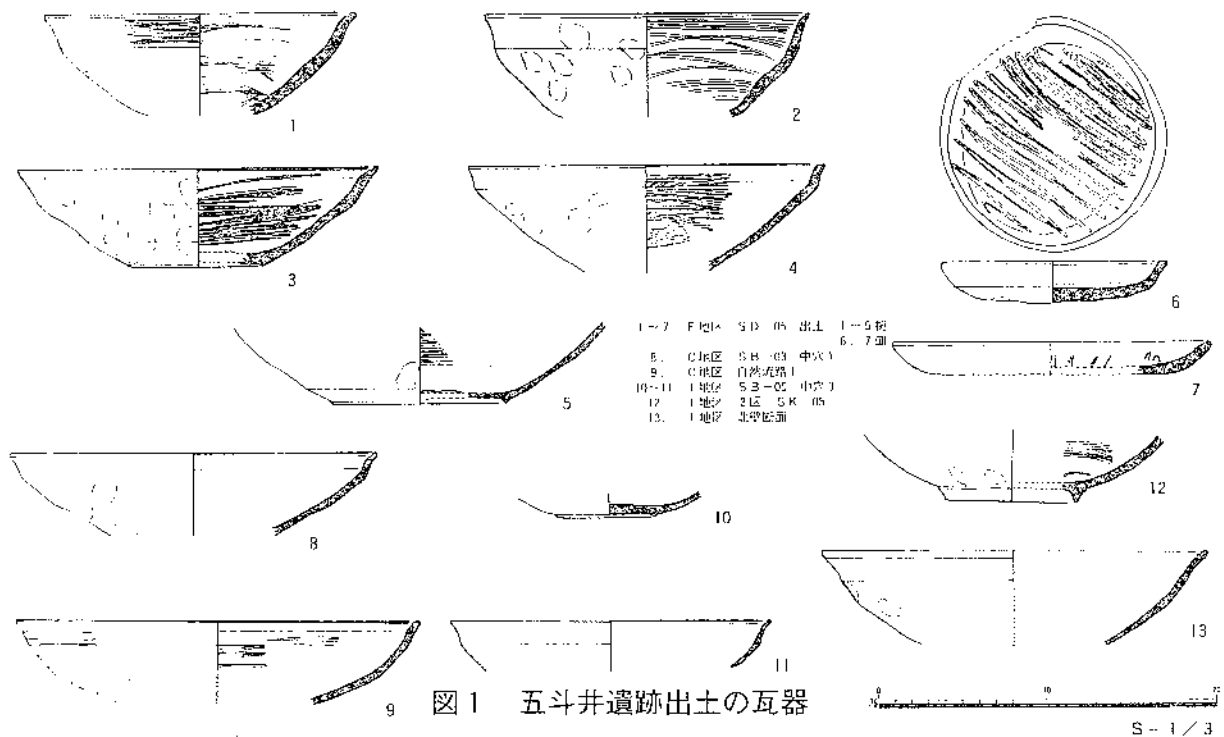


表1 日野町内瓦器検出土遺跡地名表

遺跡名	所在地	出土形式	文献	備考
1 内池遺跡	内池	1	ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書X-5-2 日野町埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集	
2 宮ノ前遺跡	石原	1、2	日野町埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集	
3 中甲津遺跡	西大路	1、3	日野町埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集	
4 宮ノ後遺跡	村井	?	日野町埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集	底部のみ
5 播沢遺跡	内池	1、3	日野町埋蔵文化財発掘調査報告書 第7集 日野町埋蔵文化財発掘調査報告書 第8集	
6 小御門	小御門	1、2	ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書X-5-2 日野町埋蔵文化財発掘調査報告書 第8集	
7 松尾遺跡	松尾	1、2	日野町埋蔵文化財発掘調査報告書 第9集	
8 森西城遺跡	木津	1、	ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書XIX-4	
9 十禅寺遺跡	十禅寺	1、	ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書X-5-2 ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書XIX-4 ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書XX-5	
10 西中道遺跡	村井	1、3	日野町埋蔵文化財発掘調査報告書 第9集 ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書XIX-5	小碗あり
11 北代遺跡	大谷	?	ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書XIX-9	底部のみ
12 古堂遺跡	木津	1、2	原宮かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書IX-2	
13 五斗井遺跡	河原	1?、2、3	ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書XX-6	

ところで、今問題にしている五斗井遺跡出土品はその特徴として、体部の屈曲を挙げている。直線的に立ち上がることが多い近江型瓦器碗の中では異質な部類に入ると思われる。日野町で出土している瓦器碗を見ていると、五斗井遺跡出土品と同じような形態をしているものが往々にして見つかる。断定はできないが、近江型瓦器碗の中にも地域差が存在するのかもしれない。

五斗井遺跡出土品にはもう一つ異質な側面を指摘できる。それは、ほとんど瓦器だけで出土する碗形態の土器を占めていることである。通常、蒲生郡内での瓦器の出土の仕方を見ていると、近江型黒色土器碗に混じっていることが多い。またその量も圧倒的な黒色土器碗に対して少なく、近江八幡市域ではごく僅かといった状況である。しかしながら、日野町では一応近江型黒色土器碗が碗形態の主流を占めるのであるが、瓦器碗が碗形態の主流を占める事例が少なからず見受けられ、五斗井遺跡出土品もその様な一例であると考えられる。

以上に述べたこの様な状況が、時期差なのか、もしくは地域差なのかは比較の対象が少ないため、現状では断定しがたいものがある。しかしながら実際のところは、高台の形態などを見ているとどう考えても蒲生堂廃寺のものと五斗井遺跡のものとは明らかに時期差があるのは解かる。もし、ここに示した状況が本当に時期差であるのならば、蒲生堂廃寺出土の瓦器碗のような大和型瓦器碗に酷似した形態のものから、在地色の強い形態に移行したと考えるのが他の地域の瓦器碗の編年案からも妥当であると言える。また、その際には近江での瓦器碗の生産の開始に大和型瓦器碗に関わりを持っていることも容易に想像はできる。

近江を取り巻く他地域の状況

中世において、近江以外にも畿内の周辺部では在地での瓦器碗の生産が行われていることが知られている。特に大和型瓦器碗との密接な関係を持つという点から見てみると、注目すべき同様な事例として、近江に隣接する、伊賀での瓦器碗の生産が挙げられる。

「伊賀型瓦器碗」は山田猛氏(9)によって提唱され、その発生に大和型瓦器碗と密接な関係を持ち、その



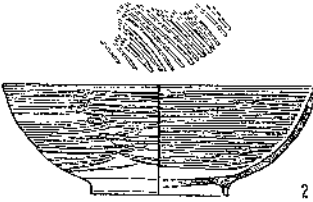
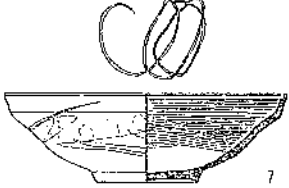
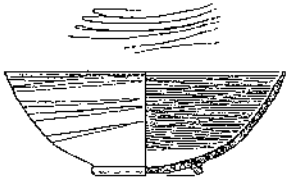
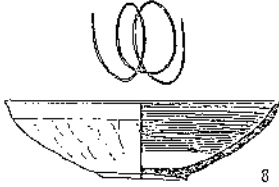
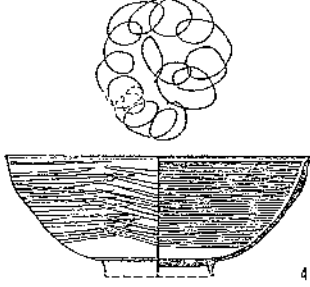
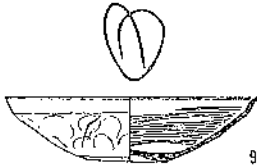
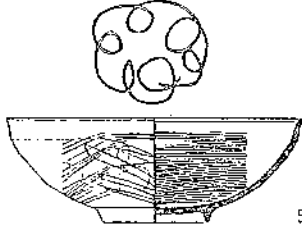
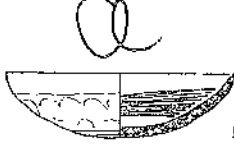


後、独自の特徴を示して変化していったことを指摘されている。伊賀での瓦器碗の出土例を見てみると、意外に五斗井遺跡を始めとする日野町内で出土した瓦器碗と共通の特徴を持つ物が多い。また、近江型黒色土器碗全体との比較でも、口縁端部内面の沈線の形態や外面のヘラミガキの省略など共通項が見出せる。

日野町出土の瓦器碗の形態と比較すると、タイプ1はその成立過程から同じようなものがある事は容易に理解でき、体部が直線的に立ち上がるタイプ2についても同じ形態のものが見出せる。ところがそれに加えて、タイプ3のものについて見てみても、例えば、阿山郡大山田村西沖遺跡や上野市下り台遺跡で日野町で出土するような体部が屈曲するものが見られる。調整技法では外面のヘラミガキが省略されていく点が共通し、外面にかなり指圧痕が残っていることも同じように指摘できる。暗文の施し方等に少し違いがあるように思えるが、器の形だけで考えると全く同じであるといっても過言ではない。このように、従来近江型瓦器碗の成立に大和型瓦器碗との繋がりを強く指摘されてきた訳ではあるが、伊賀型の瓦器碗とも共通項がいくつか見出せる。同じ大和型瓦器碗から派生した紀伊型瓦器碗が近江や伊賀のものと共通項が見出しにくいことを考えると近江型瓦器碗の成立に伊賀との繋がりも考慮に入れるべきではないかと思われる。

終わりに

今回指摘した事象は実は単に表面的なものであるかもしれないし、蒲生郡以外での出土例を加えて今後細かく検討していくと違った見解が出てくるかもしれない。特に、伊賀型瓦器碗と非常に似る点についてはただ単純に似ているだけなのか、そうでないのかは今の段階では判断を付きかねる。また、近江型瓦器碗の中に存在する形態の違いが何を意味するのかも大きな問題である。これらの問題が解決されれば、未だ曖昧模糊とした滋賀の瓦器の姿が明らかになると信じている。

この一文は五斗井遺跡の調査で出土した遺物の整理過程で気づいたことをまとめたものに、その後筆者が知り得た最近の研究成果加味して書き直したものである。実際のところは五斗井遺跡出土の瓦器碗

段階	型式	具 体 例	段階	型式	具 体 例
I	1	 1	II	3	 3
	2	 2		4	 4
	3	 3	III	1	 1
II	1	 4		2	 2
	2	 5		3	 3
		 0 10cm		4	 4

1=川久保遺跡 2・5=上寺遺跡 3・6-7=西神遺跡
4=的場遺跡 8=大山田村田中遺跡 9-11=才良

図2. 伊賀型瓦器碗編年表 (注. 9文献より引用)

から見えることを思い付くままに書き連ねたに過ぎないのであるが、これも筆者の力不足であると痛感している。また、調査時から幾分年月が経っているため、古い知見に基づいて述べているところも有るが、その点についてはご容赦願いたい。

注

- (1) 文中の「畿内」とは、大和、山城、摂津、河内、和泉のいわゆる「五畿内」のことを指す。
- (2) 北川 浩「蒲生堂庵寺跡土壇 8・9 出土の瓦器について」『滋賀考古学論叢 第2集』滋賀考古学論叢刊行会 1985
- (3) 『県営ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書 X-X-6 普光寺遺跡・五斗井遺跡』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1993
- (4) 山川 均「土器をまとめてすてること」『文化財学論考』文化財学論考刊行会 1994
- (5) 『日野町埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集』日野町教育委員会 1986
- (6) 注(2)に同じ
- (7) 森 隆「中世土器の生産に見る地域型の提唱と工人集団の系譜について」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』日本中世土器研究会 1992
- (8) 瓦器碗の「型」については森島康雄他「瓦器碗」『概説・中近世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会 1996に従う。
- (9) 山田 猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』日本中世土器研究会 198

編 集 後 記

『紀要』の第10号をお届けいたします。

本号には多数の寄稿をいただいたため、紙幅の関係上、体裁を若干変えざるをえなくなりました。見にくい点等があらうかと思いますが、どうか御了承下さい。

さて、本号をもって、この『紀要』も10歳を迎える事になりました。ここに至る間には、多くの方々の御指導・御協力をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。今後とも職員の研究活動の拠点として、さらに研鑽をつんでいきたいと考えておりますので、皆様からの積極的な御叱正・御鞭撻を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

(T・M、T・T)

平成9年3月

紀 要 第10号

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会
滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL:(0775-48-9780)
印刷・製本：明文舎印刷商事株式会社
滋賀県長浜市森町中久保386